

## □東日本大震災の災害報道の問題点

## ～教訓は正しく伝えられているか～

江戸川大学メディアコミュニケーション学部教授

(名古屋大学減災連携研究センター客員教授・元NHK記者) 隈本邦彦

## はじめに

筆者は、長年(1980年から2005年までの25年間)NHKの報道記者として、さまざまな災害報道に携わってきた。その経験をもとに、そして、これまでやってきた報道へのきわめて深い自己反省を込めて、災害報道の本来あるべき姿について論じてみたい。

結論からいえば「そもそもマス・メディアというのは災害の教訓を伝えるのが下手なのではないか」と筆者は考えている。

東日本大震災の災害報道においても、テレビ、新聞などのマス・メディアは、災害の「情報」を伝えることについてはまずまずうまくやったが、災害の「教訓」を伝えることについては“いつものように”失敗した。

## 教訓を伝える、ということとは

そもそも「教訓」とは一般に、何か重大なことが起こった後、その結果を知った上で「本当はこうしておけばよかった」とか「本当はこうすべきではなかった」ということがわかる、というものである。

それを地震・津波災害に当てはめると、たくさんの方が亡くなったり傷ついたという重大な結果を知った上で、本当はもっと早めに避難すべきだったとか、この点にしっかり備えておくべきだったというような知識が得られるということになる。このような教訓は、これから災害を迎える国民、すなわち首都直下地震や南海トラフ巨大地

震に備えなければならない多くの国民にとって役立つものとなるはずだ。だからこそマス・メディアには、災害報道を通じて災害から得られた教訓を、繰り返していねいに伝えて行く義務がある。

ところがそこで難しい問題にぶち当たる。マス・メディアである以上、当然その情報は不特定多数の視聴者・読者を対象に発信される。その報道を「誰が見ているかわからない」のが宿命なのである。当然、被災者も、被災者の家族も、さらに被災者に心を寄せる全国の視聴者・読者も見ているだろう。

そうなる心配なのは、災害の教訓すなわち「本当はこうすべきだった」「こうすべきではなかった」ということを、災害後に繰り返し伝えたと、それはあたかも、被災者の(特に亡くなった人の生前の)行動を批判しているように聞こえるのではないかと、という懸念が生じることである。

確かに被災者の家族にしてみれば「災害後に東京からやってきたマスコミの奴らが、(津波がどこまで来たという結果を知った上で)、亡くなった人たちの行動を批判するのか」と反発したくなる気持ちもわかる。つまり災害の教訓をあからさまにストレートに伝えることは「死者を鞭打つ報道」「被災者にやさしくない報道」という批判を受けるおそれがあると記者たちは考えるのである。

## ほめてもらえる報道に走るメディア

一方、逆に「被災者にやさしい報道」として確実にほめてもらえる報道がある。例えば「早く仮

設住宅を作るべきだ」とか「復興予算をもっと増やせ」といった報道だ。あるいは「災害を乗り越えてがんばる家族」とか「人と人の絆(きずな)」といった報道も、被災者に寄り添った報道としてほめてもらえるだろう。あまり物を考えない記者たちは、そのような、確実にほめてもらえる報道に力を入れることになる。

それだけではない。震災後、メディアの側にも、被災者の行動を批判することは許されないという雰囲気があったことも確かだ。例えば、被災地から遠く離れた愛知県蒲郡市の金原久雄市長(当時)が、震災5ヶ月後に「三陸地方には歴史的に大津波が来ている記録があるのに、そこに家が建っていることがおかしい」という発言をした。するとすぐに「多くの被災者が避難している中で、配慮を欠いた発言として反発を招きそうだ(2011年8月27日毎日新聞)」と新聞・テレビ各社に報じられてしまった。そして実際、その後の議会で追及され陳謝するはめになってしまった。

だが金原市長が言ったことは、住民の命を守る責任を持つ自治体の長としてある意味正しい。例えば1946年南海地震の津波で壊滅的な被害を受けた高知市の海岸付近には、災害後しばらくは誰も家を建てなかったのに、半世紀が過ぎた今、たくさんの住宅が建っている。繰り返しやってくる自然災害の教訓を現代人が忘れやすいという証拠だ。東日本大震災でも、宮城県名取市閑上地区には自



写真1 多数の犠牲者が出た宮城県名取市閑上の老人施設(2011年8月筆者撮影)

力で避難できないお年寄りがいる特別養護老人ホームが海岸のすぐ近くにあつて、たくさんの犠牲者を出した。(写真1)「災害リスクを考慮したまちづくりが必要だ」と正しいことを発言した市長、それが少しでも被災者批判に聞こえるようなら陳謝しなければならない、そんな雰囲気が震災後の世の中にあつたのである。

そんな中であるから、多くのマス・メディアは、震災の教訓をそっとオブラートにつつんだような表現で伝えたり、まったく伝えなかったりした。つまり多くの国民は、ただ災害報道を見ているだけでは災害の教訓が何だったのかわからないという状態に置かれていたのである。

### 繰り返し分厚く伝えられる「釜石の奇跡」

他の事例も見てみよう。岩手県釜石市の釜石東中学校と鶴住居小学校では、校舎3階までの高さの津波に襲われたが、子どもたちは地震直後から整然と高台に避難し全校生徒・児童のすべてが助かった。それどころか、釜石市内の小中学校、高校、幼稚園、保育園に至るまで、学校・園管理下にあつた生徒・児童・園児はすべて全員助かった(亡くなったのは欠席や早退で自宅にいた5人のみだつた)。このことは「釜石の奇跡」として繰り返し分厚く報じられ、NHKスペシャルでも放映された。気象庁はこのエピソードをもとにアニメを制作、気象庁HPから誰でもダウンロードできるようになっている。(写真2) <http://www.>



写真2 気象庁作成アニメ「津波からにげる」の1シーン

jma.go.jp/jma/kishou/books/tsunami\_dvd/index.html

この奇跡が実現したのは、災害情報学の専門家で群馬大学の片田敏孝教授らが、釜石をフィールドに防災教育を熱心にやってきた結果である。片田教授は子どもたちに「自分の頭で考えろ」「想定さえも信じるな」「地震後津波が来るまで時間がある限りベストを尽くして逃げろ」「率先避難者たれ」と教えてきた。子供たちはその教え通りに行動した。自分たちの頭で最悪の事態を考えて率先避難し、最初に到着した避難所に落ちつくことなく、さらにそこよりも高い場所へと自主的に避難していった。その結果、生徒・児童の死亡率ゼロが達成されたのである。

### 「大川小学校の悲劇」は詳しく報じられない

一方、宮城県石巻市の大川小学校の状況はまったく違っていた。こも校舎2階の天井に達する津波に襲われたが、全校児童108人の70%にあたる74人が亡くなったり、行方不明になった。

地震発生から津波襲来まで51分。この間、何をしていたのか？市の調査によると、児童たちは、校庭に整列させられ、まず安全確認のための点呼が行われたという。その頃には、集落の人たちも次々と避難してきていた。そこで、保護者が確認できた児童は、順に保護者に引き渡された。そこから先生たちがどこに避難するか議論を始めたらしい。実は大川小学校では、地震が来たら津波に備えて「高台に逃げる」としか決まっておらず、その「高台」どこなのかが決まっていなかった。本格的な津波避難訓練は一度もしたことがなかった。

大川小学校には裏山があった。急斜面だが谷筋を選べば登れないことはない。しかし当日は雪が積もっていて、子供たちが足を滑らせてけがをする恐れもあった。先生たちが躊躇したのもわかる。

近くの橋のたもとのあたりが少し高くなっていた。標高でいえば5メートルくらいだろうか。そ

こに逃げるか、けが人が出る覚悟で裏山の斜面を登らせるか、議論になったのだろう。そうこうしているうちに時間がどんどん過ぎ、約4キロ離れた海岸付近に土煙が見えた。津波がやってきたのだ。児童と先生たちはあわてて橋のたもとに向かって歩き始めた。しかし津波は容赦なくその行列を襲い、子どもたちの命を奪った。

筆者はゼミの学生とともに2012年10月、大川小学校を訪れた。壊れた校舎の前に祭壇が作られたくさんの花が供えられていた。(写真3)そして校庭の裏に行ってみると、山に上がっていける道が見つかった。(写真4)実はそんな無理をしなくても、普通に県道を歩いて5分も行けば絶対に津波の来ない高さの場所まで行けた。津波に対す



写真3 宮城県石巻市大川小学校の祭壇  
(2012年10月筆者撮影)



写真4 校庭の裏山には登れる谷筋の道があった

る備えさえあれば、釜石のように児童全員の命を救うことができたのである。

この悲劇の原因は何か。先生たちによる避難誘導の失敗である。そしてそれが起きた背景は何か。その地域における最悪の災害を想定したしっかりしたマニュアルを決めておらず、本格的な避難訓練を一度もしたことがなかったことである。

しかしこのことが詳しく分析され、繰り返し報道されてはいない。たまに報道されるにしても、防災マニュアルを決めていなかった石巻市教育委員会の責任を問う記事やニュースばかりである。それはなぜだろうか。

理由はおそらく、先生たちの死亡率が、児童の死亡率（70%）を上回る90%だったからだ。その場にいた11人のうち実に10人が亡くなった。彼らの避難誘導の失敗の原因と背景を繰り返し報道することは、まさに「死者を鞭打つ報道」「被災者にやさしくない報道」と受け取られかねない。

## 勇気を持って「災害の教訓」を伝えるべきだ

でもどうだろうか？多数の児童の命が失われた原因を**追究**することと、その責任を**追及**することとは、まったく次元の違う話だ。この大川小学校の悲劇は、しっかりと検証されるべきであり、その上で、悲劇の原因が先生たちの避難誘導の失敗であって、その背景に最悪の事態への備えの不足があったということがしっかりと報じられるべきなのである。

マス・メディアはふだん、何か大事故が起きると「責任追及」に走ってしまう悪い癖がある。責任者出てこいという姿勢が社会の木鐸としてのマス・メディアの役割だと短絡的に思い込んでいる記者も多い。特に事故の後、警察が業務上過失致

死の疑いで捜査を始めたりすれば、すっかりその“事件取材”のほうに血道を上げてしまう。ふだんがそんなだから、大川小学校の悲劇の原因を**追究**して報道すると、亡くなった先生たちの責任を**追及**をするような報道してしまうと思っているのだろう。

しかしほんとうは、先生たちの責任を一片も追及することなく、（もちろん亡くなった子の親の立場からすれば許せないと感じる気持ちもわかるが、それに十分配慮した上で）避難誘導に失敗するとたくさんの子供を死なせてしまうことになるという「教訓」だけ、ありがたくいただくことが大切なのだ。そしてその「教訓」から得られる再発防止策として、例えば全国の学校で自分たちの地域に起こりうる最悪の災害を想定し、対策を考えて訓練しておくなどの対策ができるだろう。そういう災害報道ができてこそ、「教訓」を伝えるマス・メディア本来の役割を果たしたことになるのだ。

## おわりに

大川小学校の祭壇に向かって手を合わせながら、筆者は、全国の学校関係者、防災関係者にここに来て自分の目で見て考えてほしいと思った。壊れた校舎以外なにもなくなり、鳥のさえずりだけが聞こえるこの場所に立てば、子ども達の命を守ることの責任の重さをきっと“我がこと”として感じるができるだろう。マス・メディアの関係者もしかり。「教訓」を自分たちが勇気を持って伝えていかなければならないことを感じ取ってほしい。災害の「教訓」をしっかりと伝えること、それが亡くなっていった数多くの被災者へのなによりの供養になるのだから。